

知覚動詞の補文に出現する受動表現とその容認可否性に関する一考察

村岡宗一郎

1. はじめに

知覚動詞は過去分詞に加えて、(1)のようにその他受身を表す表現を補文にとる。このうち、原形不定詞補文における *be + -en* の使用について先行研究でもその容認可否性に揺れがある一方、現在分詞補文における *be + -en* の使用は広く許容されている。多くの先行研究が *be + -en* の容認可否性を説明するが、*being + -en* が適格文になる要因については説明はない。本研究では(1)に見られる意味的差異および容認可否性について分析していく。

(1) I *saw* the children {*beaten* / *be beaten* / *being beaten*} by their rivals.

2. 原形不定詞・現在分詞補文とその意味的特徴

受身表現を分析する前に原形不定詞と現在分詞の諸特徴を概観していく。まず原形不定詞と現在分詞は直接知覚を表し、知覚行為が生じるとともに知覚対象となる事象が生じていなければならないため、(2)は認められない。また(3)のように主節動詞よりも過去を表す表現が補文に出現することができない。さらに、(4)のように原形不定詞は知覚対象となる事象の完結性を表し、現在分詞は知覚対象となる事象の非完結性を表す。

(2) **At 6 o'clock*, John *saw* Bill {*leave* / *leaving*} *at 7 o'clock*.

(3) *I *saw* a great change {*have come* / *having come* / *be coming* / *being coming*} over him.

(4) I *saw* him {*cross* the street (= He was (almost) over) / *crossing* the street (= He was in the course of crossing it)}.

これらの言語事実から原形不定詞補文は直接知覚を表すと同時に知覚対象となる事象が完結したことを表す。一方で現在分詞補文は直接知覚を表すと同時に知覚対象となる事象が一時的あるいは進行中であることを表す。

3. 過去分詞補文とその意味的特徴

過去分詞補文も直接知覚を表すことに加えて、知覚動詞との同時性を表すため、**Today*, I *saw* him *beaten* by his friends *yesterday* は容認されない。Fenn (2022: 553) は過去分詞は知覚対象となる事象の一部始終を見聞きしたことを表す一方、*being + 過去分詞* は一時的な事象を表すという (cf. 大江 (1982: 183))。安藤 (2005: 829) は I *saw* the window *broken* by John は「ジョンが窓ガラスを割るのを見た」と「ジョンが割った窓ガラスを見た」の2通りの解釈が可能であると述べ、前者の解釈の場合、まれに受動文の *be* が現れるという。しかし、独自のインフォーマント調査では、過去分詞を動詞的に解釈する方が普通であり、過去分詞を形容詞的に解釈する際には過去分詞を前置修飾で用いる等、意味的曖昧性を排除する方法は他にもいくつか存在するという。

4. 知覚動詞の原形不定詞補文における *be + -en* の出現について

原形不定詞補文における *be + -en* の使用について、一部の先行研究では適格文と分析されるが (cf. Jespersen (1940: 155)、Baker et al. (1989: 246)、Wilder (1992: 215)、Guasti (1993: 133)、安藤 (2005: 830)、Sheehan and Cyrino (2024: 777))、多くの先行研究で非文と見なされる (cf. Bolinger (1974: 69)、Gee (1975: 376)、Declerck (1991: 490)、Huddleston and Pullum (2002: 1237)、Miller (2002: 249)、Frank (2002: 263)、Basilico (2003: 9)、Dixon (2005: 252)、Gisborne (2010: 209)、Fenn and Schwab (2017: 204)、Fenn (2022: 553) など)。この原形不定詞補文における *be + -en* の使用について、Palmer (1965: 171) は *be + -en* は稀であり、*being + -en* の使用が一般的であるという。原形不定詞補文に *be + -en* が出現できない要因として、直接知覚を表す知覚動詞構文には状態動詞が用いられないという言語事実があげられる。(5)には状態動詞が用いられているが、知覚不可能な状態的な事象を直接知覚することはできない。また原形不定詞は当該事象の完結性を表し、状態的事象は終結点を持たないことから、両者はアスペクトの観点からも意味的に相容れないと考えられる (cf. 吉良 (2025: 145))。

(5) *We *saw* dinosaurs *love* kelp.

(Felser 1999: 52)

be 受動態は動作受動に加えて状態受動としての解釈が可能であるため (cf. 村田・成田 (1996: 134))、多くの先行研究では知覚動詞の原形不定詞補文における *be + -en* の使用が非文法的と判断されている可能性が考えられる。原形不定詞補文に *be + -en* が出現できない別の要因として、原形不定詞補文における *be + -en* が過去分詞補文と意味的に競合するため、*be + -en* の使用が過去分詞補文の使用によって妨げられている可能性も考えられる。原形不定詞補文における *be + -en* の使用について、以下の実例が確認されている。(6)の訳者 Ted Goossen (私信) によれば、「ここでの *BE* は火葬の行為を強調し、彼が実際にその場に居合わせたことを示唆している」という。

(6) I couldn't stand to *see* her *be cremated*.

(Murakami Haruki. *Killing Commendatore*)

(6)の類例について BNC と COCA を用いて調査を行った村岡 (2022: 84) によれば、イギリス英語においては

be 受動と get 受動ともに 1%程度しか検出されなかったが、アメリカ英語では be 受動が 8.8%、get 受動が 23%検出され、英米ともに依然として過去分詞補文の使用が一般的であるという (cf. Felser (1999: 83))。

5. 知覚動詞の現在分詞補文における be+ -en の使用について

(1) の being + -en は多くの先行研究で適格文として扱われているが、状態受動として解釈されないのだろうか。being+ -en が状態受動ではなく一時的な状態変化や段階的な変化など動作的に解釈される可能性について、(7) の現在分詞補文における状態動詞の使用は通常許容されないが、状態の段階的な変化を表す文脈では使用できる。

(7) a. *I *saw* Tom still *resembling* your father. (Declerck 1981: 89)

b. I *saw* Tom *resembling* his father more and more every year. (Muraoka 2023: 231)

吉良 (2025: 148) も (8) について補文主語の姿が一時的なものである場合には容認可能になるという。このように状態動詞でも可変性 (一時的な状態変化や段階的な状態変化) という動作的解釈が可能になるため、現在分詞補文における be 受動態は原形不定詞補文の場合と異なり、状態受動であっても広く用いられるのである。

(8) We *saw* John {**look* / *looking*} pretty sick. (Akmajian 1977: 440)

6. まとめ

知覚動詞の補文に出現する受動表現について、その使用環境について分析してきた。過去分詞単体を補文に伴う例は過去分詞が動詞的か形容詞的かで意味的曖昧性が生じる場合も存在し、その曖昧性を解消するために原形不定詞補文に be + -en が使用されるようになったと考えられる。しかし、過去分詞単体を補文に伴う場合、過去分詞を動詞的に解釈する方が一般的であり、また上記の意味的曖昧性を排除するための方法がいくつもあるためか、原形不定詞補文における be + -en の使用はかなり限られている。さらに原形不定詞補文における be + -en の使用は状態受動の解釈を誘発するため、非文となることが多い。一方で、現在分詞補文における be + -en の使用も状態受動の解釈を受けるが、現在分詞補文が表す一時性により、当該の状態が一時的な状態や段階的に変化する状態を表す表現として見なされるため、be + -en とは異なり、being + -en は広く許容されていると考えられる。

参考文献 Akmajian, A. 1977. "The Complement Structure of Perception Verbs in an Autonomous Syntax Framework." In P. Culicover, A. Akmajian and T. Wasaw eds., *Formal Syntax*, pp. 427-460. New York: Academic Press. / 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』東京: 開拓社. / Baker, M., K. Johnson and I. Roberts. 1989. "Passive Arguments Raised." *Linguistic Inquiry* 20, pp. 219-251. / Basilio, D. 2003. "The Topic of Small Clauses." *Linguistic Inquiry* 34, pp. 1-35. / Bolinger, D. 1974. "Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and Their Vicissitude." In Phonetic Society of Japan ed., *World Papers in Phonetics Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*, pp. 65-91. Tokyo: Phonetic Society of Japan. / Declerck, R. 1981. "On the Role of Progressive Aspect in Nonfinite Perception Verb Complements." *Glossa* 15.1, pp. 83-114. / Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha. / Dixon, R. M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar, Second Edition*. Oxford: OUP. / Felser, C. 1999. *Verbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Constructions*. Philadelphia: John Benjamins. / Fenn, P and G. Schwab. 2017. *Introducing English Syntax, A Basic Guide for Students of English*. London: Taylor and Francis. / Fenn, P. 2022. *A Student's Advanced Grammar of English*. Stuttgart: utb GmbH. / Frank, R. 2002. *Phrase Structure Composition and Syntactic Dependencies*. Cambridge: MIT Press. / Gee, J. P. 1975. *Perception, Intentionality, and Naked Infinitives: A Study in Linguistics and Philosophy*. Doctoral dissertation. MIT. / Gisborne, N. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: OUP. / Guasti, M. T. 1993. *Causative and Perception Verbs: A Comparative Study*. Torino: Rosenberg and Sellier. / Huddleston, R and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. / Jespersen, O. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part V*. London: George Allen and Unwin. / 吉良文孝. 2025. 「知覚動詞構文の意味特徴」澤田治美・吉良文孝・松原史典・佐藤健児『不定詞をめぐる現象』pp. 136-153. 東京: 開拓社. / 村岡宗一郎. 2022. 「知覚動詞補文における BE+過去分詞の容認可否について」『英語コーパス研究』29, pp. 79-94. / Muraoka S. 2023. *A Synchronic and Diachronic Study on the Infinitival Selection in the Complement of Causative Verbs and Perception Verbs of the English Language*. Doctoral dissertation. Nihon University. / 村田勇三郎・成田圭市. 1996. 『英語の文法』東京: 大修館書店. / Miller, G. 2002. *Nonfinite Structures in Theory and Change*. Oxford: OUP. / 大江三郎. 1982. 『講座・学校英文法の基礎 第四巻 動詞I』東京: 研究社. / Palmer, F. R. 1965. *A Linguistic Study of English Verb*. London: Longman. / Roy, I. 2013. *Nonverbal Predication: Copular Sentences at the Syntax-Semantics Interface*. Oxford: OUP. / Sheehan, M and S. Cyrino. 2024. "Restrictions on Long Passives in English and Brazilian Portuguese: A Phase-Based Account." *Linguistic Inquiry* 55, pp. 769-803. / Wilder, C. 1992. "Small Clauses and Related Objects." *Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik* 34, pp. 215-236.